

經

濟

學

## 理論經濟學（一）

山田雄三

「一橋經濟學の危機」という聲を耳にする。私はこの言葉に或る意味で共鳴を覺えると同時に、或る意味で強い反撥を感じる。危機を意識することは躍進の前提として大切だが、それはどこまでも眞摯な危機意識でなければならぬと思う。

講義にマルクス主義の系統が十分でないことや、陣容に中堅層が缺けていることなどが、危機の現われとしてあげられているようである。しかしもしこの主張が單に講義の種目を揃え人の數を並べるといふにとどまるならば、私はこれに反対しなければならぬ。もちろん不足の講義は補わなければならないし、缺けている陣容は満

たさなければならない。しかしそれはあくまで大學自體の内面的な發展に沿って行うべきで、形式的な劃一主義にもとづくのであってはならない。無理な劃一主義によって内面的發展を犠牲にすることは避けなくてはならない。三浦先生の文明史や左右田先生の經濟哲學は決して劃一主義によって設定された講義ではない。一橋の歴史のうちにはそういう例が幾つかあって、そのためにわれわれの大學の輝かしい發展がもたらされたのである。今日、講義や陣容の整備が要求されるとしても、その解決の途はやはりこのような内面的な發展のうちに期待するのでなければならないし、また期待できると私は信じて

いる。

だから、もし眞に危機といふべきものがあるとするれば、それは大學の内面的な發展を阻害する力そのものを指すべきであろう。劃一主義の立場に立つて、講義を描え人を並べれば足りるといふような考え方をこそ、そういう阻害力であろう。このことはもちろん現状の講義や陣容に満足しているということの意味しない。これに關連してここで私がとくに注意を向けたいのは、新制大學の發足による四學部分立の影響である。新制大學の發足が直ちに悪いというのではない。ただそれが一橋全體の内面的發展と結びつくよう運営されねばならないところに今日なお問題が残っていると思う。學部間の分立の底に實質的な學問交流を計るのとなければ、恐らく舊制時代の一橋經濟學は維持し難いであろう。同時に、ジニア、シニア、大學院などの縦の關係も、いま一度検討し直すべき時期に來ていると思う。危機といへば、このような新制度の運営にこそ大きな問題が潜んでいるのではないであろうか。

ところで「一橋經濟學の危機」といふ聲については、

もっと重要な内容的な問題がある。それは時代の激しい變遷に應じて若い青年たちが行動と直結するようなものを強く要求していることである。私はこれを誤っているというのではない。しかしもしそれが學問評價の極めて低い基準によつて危機の叫びを生むとすれば、私はこれに反對しなければならぬ。眞の危機の叫びは高い學問評價の基準に立つものでなければならぬ。ジャーナリズムとアカデミズムの差も深く考えず、ルポルタージュ式の實證と計量經濟學的な實證との區別も理解せずして、一橋經濟學の危機を語るこそ、笑止の限りである。ここでもわれわれは一橋の輝かしい傳統を強調しなければならぬ。福田先生が論證や詮索の嚴密を求めて些かも假借することのなかつた鋭い理論的態度、上田先生が滿洲事變を契機に人口問題に取組まれた地味な實證的態度、これらを通じてわれわれは一橋に築きあげられたアカデミズムの精神の何ものなるかを學ぶことができる。それは實踐的行動を輕視するものではない。外面的な社會のアトモスフィアに流されず、眞に實踐的行動の基盤となる問題意識をもち、科學的探求の歩みを續ける

ことがここでいうアカデミズムである。

ここでも、もし科學的探求について問題意識の向上を阻害する力があるとすれば、それこそまさに危機といわなければならぬ。獨斷的に單に行動に直結するもの求めて科學的探求を怠る態度そのものは、このような障害力であるといわなければならぬ。もちろんわれわれは戦後の複雑なる政治經濟の動きや原子力時代に突入した人々の焦燥感に直面しており、そのために經濟學においても今日は今日としての問題意識を求めねばなるまい。私の見當だけを述べることが許されるならば、それは恐慌論や沈滞論などではなく、もっと積極的に、資本主義の場合も社會主義の場合も含めて正しい資源配置がいかなる條件のもとにいかなる原理によって行われるか

ということの探求である。最近のマルクス經濟學においてもいわゆる「廣い經濟學」なるものが強調されていることを私は重視したい。依然としてマルクス經濟學と近代經濟學とのイデオロギー的對立に固執するのでは問題意識は高められず、そういう固執にこそ却って危機と呼ばれるべきものが潜む。それはもはや單に一橋經濟學の危機というような狭いものではないであろう。

危機を語るのはよい。しかしそれは大學の内面的な發展と研究の高い問題意識をもって語られねばならない。最後に、この一文は忙中の執筆、意をつくさぬ點の多々あるを恐れるとともに、他の執筆者の原稿を拜見する餘裕のなかつたことをお断りしておく。(一橋大學教授)